

大豆・転換1～2年目（フクユタカ）

長生農林振興センター

1 地区名（集団名）

農事組合法人長南町東部営農組合

2 栽培戸数、栽培面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1 組織
- (2) 栽培面積 59.9ha
- (3) 収穫量又は出荷量 120 t（予定収穫量）
- (4) 出荷先又は販売方法 庭先販売（48 t）、JA全農（72 t）

3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	2回	4回
化学肥料（窒素分量）	0 kg/10a	3 kg/10a

4 事例のあらまし

長南町東部営農組合では、水田転作作物として大豆を栽培しています。

約60haの大規模転作により「ちばエコ農業産地」の指定も受け、小麦栽培後の麦稈をそのままに不耕起は種による一貫機械体系のもと栽培期間中化学肥料不使用・減農薬による大豆栽培を行っています。

5 背景・動機

長南町東部営農組合は、地域の14集落、203戸が参加し、集落水田営農を進めており、水稻+麦+大豆の2年3作体系で昭和59年より集団転作に取り組む営農組織です。中でも転作大豆は、不耕起栽培の確立により、以前より安定した収量の確保ができるようになりました。

現在、味噌や煮豆原材料としての需要が多い地元産大豆の供給に大きな役割を果たしてきています。そのために、以前から農産物の安全に配慮した減農薬を実施してきましたが、「ちばエコ農産物」の認証を受けることで、消費者に安全・安心な長南町東部営農組合の大豆を提供します。



6 栽培方法

重粘土地帯の長南町は、長生郡内をはじめ周辺での米の食味の評価は高いですが、水田で作る畑作物である麦・大豆の作柄は決して採算のあう生産状態ではありません。

特に、大豆での収量低下の最大の要因は湿害です。暗渠が敷設されているにもかかわらず、梅雨時期に行なわれる大豆のは種作業の遅れ、発芽不良等初期生育の遅れが生育不良を招き、収量の低下をもたらしています。

そんな中で、安定走行が可能なトラクターの導入により、確実な排水対策ができ、粘土の硬盤をどうにか破壊し、根張りを良くすることで湿害を受けない大豆を栽培する環境もできつつあります。

(1) 準備作業

ほ場周辺の畦畔際に溝を掘ることで迅速な排水が図れます。

大区画ほ場や周辺ほ場からの漏水や押水が想定されるほ場でも明渠をほ場内にも施行します。また、弾丸暗渠により本暗渠に直交する方向で、耕盤を破壊し土中に空洞を空けることで田面水を引き込み、本暗渠に導き排水効果を高め、干ばつ時の給水にも利用できます。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成17年6月20日
は種	7月1日～7月12日
収穫開始	11月17日
収穫終了	12月10日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10 a 当たり)

使用銘柄 (N-P-K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
稲藁	平成16年10月20日	500kg		0kg
麦稈	平成17年6月25日	300kg		0kg
合	計			0kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
ラウンドアップハイロード	畑地一年生雑草	平成17年6月20日
ナブ乳剤	畑地一年生イネ科雑草	7月20日
化学合成農薬使用回数2回		

(2) 土づくり

転換畑では土壌から無機化する窒素が多いため稲藁や麦稈を有機物として施し、化学肥料を使わずに根粒菌が十分窒素固定できるための土づくりを実施します。

(3) は種

は種は、不耕起は種（播種作業や発芽率の向上のため、不耕起によるは種）により6月下旬～7月上旬に実施し、栽植密度（畝間30cm×株間15cm）を狭くすることで倒伏や雑草対策を行っています。

無耕うん地にディスクで溝を切りながらは種し、中耕・培土を行わない省力栽培方法です。品種は、タンパク質含量が高く豆腐加工に適し、また、機械作業に向く「フクユタカ」を栽培しています。

(4) 除草

雑草防除は、は種前にブームスプレーヤにより除草剤を散布します。このことにより、大豆の発芽や生育障害を回避しています。畦畔雑草等は草刈機で除草しています。

7 今後の展望等

水田は、重粘土質の土壌のため、排水性が悪く、梅雨時期には種を行なうため、は種作業の遅れや、湿害による発芽不良、雑草害などが発生し、安定した収量が得られませ

んでした。不耕起は種により無中耕・無培土、雑草防除を組み合わせた体系を確立した結果、発芽が安定し、コンバイン収穫における汚粒発生が軽減しました。

長南東部営農組合では、土地改良、暗渠整備の行なわれている144haの水田にブロックローテーションによる集団転作の小麦・大豆を今後も作業受託や経営受託をすることで、水稲との2年3作体系を実践します。

また、「枝豆祭り」を通じて、消費者との交流も深めることで、安全で安心な農産物を生産する意識が高く、地場流通を積極的に進めていきます。